２０２５年２月２３日（日）　　於札幌発寒教会

「胸を打ちながら」

（ルカによる福音書１８：９～１４、詩　編５１：１６～１９）

今朝は、ルカによる福音書１８章９節から１４節までの、新共同訳聖書では、「『ファリサイ派の人と徴税人』のたとえ」と言う、小見出しがついた個所が説教のテキストになります。前回、私たちは、この直前の箇所で、「『やもめと裁判官』のたとえ」について学びました。思い出して頂きたいのですが、あそこでは、神をも畏れず人を人とも思わない、箸にも棒にもかからない不正な裁判官を、貧しい無力なやもめが、誰の助けも得られぬために、一人で立ち向かい、スッポンのように食い付いて離れず、粘りに粘って、最後は、彼をホトホト参らせ、彼女の意向に従わざるを得ないところにまで追い込んで、遂に、当所の願いを遂げる、と言うお話しでした。主イエスは、その譬え話を、「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるため」に、弟子たちになさったのですが、言わば、そこでは、祈りは本来どうあらねばならないか、願いが叶わぬからと言って、直に諦め、祈ることすら止めてしまう、と言うような、子供じみた短気を起こさず、粘り強く、執拗に、日頃から鍛え抜かれた忍耐力を発揮して、どこまでも祈り続けるべきこと、それこそが祈りの本当のあるべき姿であることを教えられたのですが、今日の箇所では、主題は同じ“祈り”であっても、ここでは、祈りの内容、真の祈りの、その本質について、典型的な二人の人物を登場させて、彼らを通し、示されるのです。

まず、最初に登場するのは、ファリサイ派の人です。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」の典型として、ここにファリサイ派の人が取り上げられることになるのですが、とは言っても、ファリサイ派に属する者が皆、そうだと言うのではありません。中には、謙虚で、柔和で、心優しいファリサイ人だっていたことでしょう。でも、類型的には、この派に属する者たちには、概（おおむ）ね、こうした類の者たちが多くいて、最大公約数的には、やっぱり、こう言わざるを得なかったのです。この個所では、こう言われています。１０節以下を、もう一度読んでみましょう。

「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています』」。ファリサイ派とは、ユダヤ教の一派であって、その意味は“分離派”で、彼らは、自らの身を清く保つために、律法、即ち、旧約聖書に定められている６１３の掟、及び、その応用編である、口伝律法のミシュナーやタルムードの細かな規則を厳格に守り、これを守らぬ者たちを不浄な者と見做し、自分たちを、彼らから分離したのです。そこで人々は、彼らを分離派・“ペルーシーム”と、そう綽名（あだな）したのです。今日の譬えに出て来るファリサイ派の人が言っていることに、嘘偽りはありません。彼が、こう自負するだけのことはあったのです。「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく」とは、モーセの十戒の中の、第八戒「汝盗むなかれ」、第九戒「汝偽証するなかれ」、第七戒「汝姦淫するなかれ」を指しているのですが、この三つに、残りの他の戒をも代表させて、本当に彼らは、モーセの十戒に定められている、前半の神に対する戒は当然のこと、後半の隣人に

対する戒も、これら全部を、落ち度なく、細心の注意を払って、厳格に、守っていたのです。それだけではありません。律法に定められている以上のことをも守っていたのです。それは、「週に二度断食し、全収入の十分の一を献げて」いたからです。断食に関しては、律法では、年に一度、第七の月の十日（太陽暦では９月の下旬か、１０月の初旬にその日はやって来ます。）に行われる“大贖罪の日”（ヨーム・ハキプール）に、ただ一度だけ行うことが義務付けてられていたのですが（レビ記１６：２９参照)、彼らは、それでは不十分だと考えたのでしょう、何と週に二度、月曜日と木曜日に、断食を行ったのです。十分の一の献げ物に関しても、また、同じように、律法では十分の一を献げるのは、農作物だけに限られていたのですが（申命記１４：２２、２３参照)、彼らは何と、全収入の十分の一を献げたのです。既に、十分の一が献げられた後、売りに出された品物を買った際にも、改めて、その十分の一を献げ直すと言った、徹底ぶりだったと言います。兎に角、その信仰生活は、外面的には、全く非の打ち所のないものだったのです。だから、彼らがやっている、そのこと自体には、非難すべきことは何もなく、主イエスも、また、そのことに関しては、何も、非難めいたことは仰ってはおられないのです。主イエスが問題にされたのは、彼らの真面目さ、熱心さ、一途さではなく、何時の間にか、彼らの心に宿り、根を下ろし、その信仰を毒し、蝕（むしば）みつつあった、“驕り”であり、“高ぶり”であり、“他への蔑み”だったのです。

この譬えで、ファリサイ派の人の祈りについて、彼は、神殿に上った後、恐らく、彼の定席になっていたのであろう、境内の中の、とある場所に「立って、心の中でこのように祈った。神様、わたしはほかの人たちのように、・・・また、この徴税人のような者でないことを感謝します」と、そう祈った、と、述べられています。一応彼は、「神様！」と、神に呼びかけてはいます。でも、実際は、神を真っ直ぐに見てはいないのです。と言うのは、「心の中で」と、日本語に訳されているところを、直訳すれば、「自分に向かって」、或いは、「自分自身に対して」と言うことになり、彼は、見た目には、一応は、神に向かって祈っているような恰好はしているのですが、実際は、そうではなく、自分自身に向かって語っていたに過ぎなかったのです。そして、その自分を、密かに、自分の周囲にいる他の者たちと比べていたのです。彼の目には、神ではなく、「ほかの人たち」、特に、あの「徴税人」の姿しか写っていなかったのです。彼らと比べて、人間の値打ち、信仰の程度、いずれに関しても、自分の方が遥かに勝っている、と、得意になっていたのです。でも、もし彼が、神を見て、神と自分を比べていたら、とても、あんな驕った言葉は出て来なかったことでしょう。

ヘブライ人への手紙４章１２節以下に、こう記されています。「というのは、神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。更に、神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」と。自分を、神ではなく、人間である、他の者と比べている限り、幾らでも誇ることができます。都合が悪くなれば、比較する相手を、ドンドン自分より程度の低い者に変えて行けば、よいのですから。こうして行けば、幾らだって、自分を誇り続けることができます。動かない基準で、自分を測るのではなく、その時々の自分に合わせて、都合よく、基準を変える生き方を続けている限り、他人に対する優越意識は、決して消え去ることはありません。でも、基準を神に置くならば、そう言う訳には行かなくなります。神には、「変化とか回転の影とかいうものはない」（ヤコブの手紙１：１７　口語訳）ですし、「すべてのものが神

の目には裸であり、さらけだされている」からで、誰であれ、また、何をもってしても、神の目を誤魔化すことはできないからです。祈りとは、本来、このような神の前に立つことであって、もし、本当に、そうした祈りの本質を弁（わきま）えていたならば、とても、とても、「神様！わたしはほかの人たちのように、・・・また、この徴税人のような者でもないことを感謝します」などと言ったような、間の抜けたことは、言えなかったはずです。それでも尚、そう言えるとすれば、外でもない、神をそのようなお方だとは、少しも思っていない、と言うことの、何よりの証明になるのではないでしょうか。

これに対し、徴税人はどう祈ったか、１３節に、こうありました。「ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください』」と。徴税人とは、支配国のローマ帝国に雇われて、自国民から税を徴収し、それをローマ帝国に納める、正に、読んで字の如く、税を徴収する人のことだったのです。彼らは、その権利をローマ帝国から買い取り、請負制で業務を果たしましたから、手数料は、彼らのシャジ加減一つ、途中、幾らでも鞘（さや）が抜けたのです。だから、同国民からは、売国奴、守銭奴、と言われ、蛇蝎（だかつ）のように嫌われたのです。でも、彼らだって、皆が皆、こんな仕事を好き好んでやっていたわけではなく、生活のためにやむなく、或いは、行き掛かり上、止むを得ず、やっていた者もいたはずです。現に、主イエスの十二弟子の中には、レビ、又の名をマタイと言った元徴税人が含まれていましたし、次の章で私たちが学ぶことになるザアカイも、徴税人でした。だから、一概に、徴税人とは言っても、そこには個人差があり、その心の内は様々だったのです。従って、この譬えに出て来る、殊勝な徴税人がいたとしても、何も可笑しくはないのです。彼は、徴税人をやりつつも、こんなことを何時までも続けていてよいのか、と、常に、心は鬱々（うつうつ）として、晴れやらなかったのかも知れません。

彼は、祈るため、神殿の境内に入りはしましたが、本殿からは、遠く離れて立ち、目を天に上げようともせず、祈りました。とても、神に近づくことはできず、まともに、天の父なる神を仰ぎ見ることもできず、だから、少しでも身を遠ざけ、目を伏せていたのです。それは、彼が、神を身近に感じ、神の清さに圧倒されて、今にも滅びそうな自分を強く意識したからです。彼は、見た目には、神より遠く身を隔てたり、出来るだけ神を見ないようにしていたのですが、それによって分かることは、彼は、誰よりも神の近くにいて、真っ直ぐに神を見ていた、と言うことです。だからこそ、滅びるばかりの自分の汚れに堪えられず、敢えて、遠ざかり、目を伏せたのです。心が神に近い時、却って、現実には、その反対の行動が生まれるのです。この時の徴税人が、正に、そうでした。

更に、この時、彼は「胸を打ちながら」、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈りました。「胸を打ちながら」と言う表現は、ルカによる福音書には、もう一箇所２３章４８節に出て来ます。そこには、主イエスが十字架上で息を引き取られた最後の場面で、現場監督であった百人隊長は、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を讃美したのに対して、群衆は皆、「胸を打ちながら」帰って行った、と、そう記されています。胸を打つとは、深い感動を覚え、更には、強く良心を揺さぶられた時に、人が取る行動です。今日の譬えに出て来た徴税人も、神を身近に感じ、その清さに圧倒されて、滅びる外ない自分を思い知らされると同時に、直感的に、そこには赦しがあり、慰めがあり、平安が約束されていることを悟ったからでした。もし、そうでなければ、一時もそこに留まることに堪えられず、一目散に逃げ出したことでしょう。そうではなく、罪の自分を自覚しながら、それでも尚、神の前に留まり続け得たのは、そこ以外には、他のどこにも、真の救いがないことを確信したからです。その彼の直観に間違いはありませんでした。何故なら、

主イエスは、「義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない」と言われたからです。義とされるとは、言い換えれば、赦しに与る、と言うことで、義人でないにも拘わらず、あたかも義人であるかのように、神に受け入れられることを言うのです。ファリサイ派の人には、その必要はありませんでした。罪の自覚がないばかりか、彼は、彼自身によって、既に、自分を義人としていたからです。つまり、手前味噌、自己免許の、自己義認の中に生きていたからです。

どうして、義とされたのは徴税人の方であって、あれほど自分の正しさには絶対の自信を持っていたファリサイ派の人ではなかったのでしょうか。それは、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」からなのです。今日私たちは、聖書朗読の折り、旧約聖書からは、詩編５１編の１６節から１９節までが読まれました。あそこの１９節では、こう歌われていました。「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を/神よ、あなたは侮られません」と。自分の義を誇り、驕り高ぶる心を、神は退けられ、打ち砕かれた、悔いる心をこそ、神は喜び、受け入れられるのです。自然の法則も、また、そうなっています。高い山には、雪が積もり、氷が張りついて、気温が低いため、植物は育ちません。だから勿論、花も咲きません。しかし、山を切り裂く谷間には、春ともなれば、雪が解けて、川となって、地を潤し、そこには植物が育ち、色とりどりの花々が咲き乱れます。このように。謙る心にこそ、美しく、また香しい信仰の花は咲くのです。敢えてそうするのではなく、神の現臨に触れれば、自ずから、そうならざるを得ないのです。

私たち、今日の学びを終えた今、他人との比較の中に生きるのではなく、神を真っ直ぐに見て、神の御言葉に聞きつつ、ひたすらに歩む、信仰の生涯を、共々、励まし合いつつ、全うしたいものだと思わずにはおられません。

（三輪恭嗣）